

予 防 接 種 の ご 案 内

－ 大 網 白 里 市 －

令和 7 年 3 月現在

目 次

◆ 予防接種を受けましょう……………	2
◆ 予防接種を受けに行く前に……………	2
◆ 予防接種の計画を立ててみましょう……………	5
◆ 予防接種の対象となる病気とワクチンについて	
ロタウイルス感染症……………	6
B 型肝炎……………	7
小児の肺炎球菌感染症……………	8
ジフテリア・百日せき・破傷風・ポリオ・ヒブ感染症……………	9
結核……………	11
麻しん・風しん……………	12
水痘……………	14
日本脳炎……………	15
ヒトパピローマウイルス感染症……………	16
◆ 副反応が起こった場合の対応……………	18

◆ 予防接種を受けましょう

お母さんが赤ちゃんにプレゼントした病気に対する抵抗力(免疫)は、百日せきでは生後3か月までに、麻疹(はしか)では生後12か月までにほとんど自然に失われていきます。そのため、この時期を過ぎると、赤ちゃん自身で免疫をつくって病気を予防する必要があります。その助けとなるのが予防接種です。

子どもは発育と共に外出の機会や、他の人と接触する機会が多くなり、感染症にかかる可能性も高くなります。

—感染症—

ウイルスや細菌などの病原体が体内に入り、体内で増加することによって発症する病気のことです。

病原体の種類によって、発熱やせき、頭痛、発疹、下痢などをはじめとするさまざまな症状が出現します。

◆ 予防接種を受けに行く前に

(1) 一般的注意

予防接種は体調のよいときに受けるのが原則です。日頃から保護者の方はお子さんの体質、体調など健康状態によく気を配っていただき、安全に予防接種を受けられるよう、保護者の方は、以下のことに注意の上、当日に予防接種を受けるかどうか判断してください。

- ① 当日は、朝からお子さんの状態をよく観察し、普段と変わったところのないことを確認するようにしましょう。予防接種を受ける予定であっても、体調が悪いと思ったら、かかりつけ医に相談の上、接種をするかどうか判断するようにしましょう。
- ② 受ける予定の予防接種について、必要性や副反応についてよく理解しましょう。わからないことは、接種を受ける前に接種医に質問しましょう。
- ③ 母子健康手帳は必ず持って行きましょう。
- ④ 予診票は、接種する医師への大切な情報です。責任をもって記入するようにしましょう。
- ⑤ 予防接種を受けるお子さんの日頃の健康状態をよく知っている保護者の方が連れていきましょう。なお、予防接種の効果や副反応などについて理解した上で、接種に同意したときに限り、接種が行われます。

(2) 予防接種を受けることができない場合

- ① 明らかに発熱(通常 37.5℃以上)をしているお子さん
- ② 重篤な急性疾患にかかっているお子さん(その後の病気の变化もわからないことから、その日は接種を受けないのが原則です。)
- ③ その日に受ける予防接種の接種液に含まれる成分で、アナフィラキシーを起こしたことがあることが明らかなお子さん
- ④ BCG 接種の場合においては、外傷などによるケロイドが認められるお子さん
- ⑤ B 型肝炎の予防接種の対象者で、母子感染予防として、出生後に B 型肝炎ワクチンを受けたお子さん
- ⑥ ロタウイルス感染症の予防接種の対象者で、腸重積症の既往歴があることが明らかなお子さん、先天性消化管障害を有するお子さん(その治療が完治したお子さんを除く)及び重症複合免疫不全症の所見が認められるお子さん
- ⑦ その他、医師が不適当な状態と判断した場合

(3) 予防接種を受ける際に注意を要する場合

以下に該当すると思われる保護者の方は、かかりつけ医がいる場合には必ず前もってお子さんを診てもらい、予防接種を受けてよいかどうかを判断してもらいましょう。受ける場合には、かかりつけ医のところで接種を受けるか、あるいは診断書又は意見書などをもらってから他の医療機関で受けるようにしてください。

- ① 心臓病、腎臓病、肝臓病、血液の病気や発育障害などで治療を受けているお子さん
- ② 予防接種で、接種後 2 日以内に発熱のみられたお子さん及び発疹、じんましんなどアレルギーと思われる異常がみられたお子さん
- ③ 過去にけいれん(ひきつけ)を起こしたことがあるお子さん
けいれん(ひきつけ)の起こった年齢、そのとき熱があったか、熱がなかったか、受けるワクチンの種類などで条件が異なります。必ず、かかりつけ医と事前によく相談しましょう。
- ④ 過去に免疫不全の診断がなされているお子さん及び近親者に先天性免疫不全症の者がいるお子さん
- ⑤ ワクチンにはその製造過程における培養に使う卵の成分、抗菌薬、安定剤などが入っているものがあるので、これらにアレルギーがあるとされたことがあるお子さん
- ⑥ BCG 接種の場合においては、家族に結核患者がいて長年に接触があった場合など、過去に結核に感染している疑いのあるお子さん
- ⑦ ロタウイルス感染症の予防接種においては、活動性胃腸疾患や下痢等の胃腸障害のあるお子さん

(4) 予防接種を受けた後の一般的注意事項

- ① 予防接種を受けた後 30 分間程度は、医療機関(施設)でお子さんの様子を観察するか、医師とすぐに連絡をとれるようにしておきましょう。急な副反応が、この間に起こることがまれにあります。
- ② 接種後、生ワクチンでは 4 週間、不活化ワクチンでは 1 週間は副反応の出現に注意しましょう。
- ③ 接種部位は清潔に保ちましょう。入浴は差し支えありませんが、接種部位をこすることはやめましょう。
- ④ 接種当日は、はげしい運動は避けましょう。
- ⑤ 接種後、接種部位の異常な反応や体調の変化があった場合は、速やかに医師の診察を受けましょう。

◆ 予防接種の計画を立ててみましょう

(1) ワクチンの種類と特徴

予防接種で使うワクチンには、生ワクチン(経口生ワクチン含む)と不活化ワクチンの 2 種類があります。

【生ワクチン】

- ・BCG
- ・麻しん風しん混合(MR)ワクチン
- ・麻しんワクチン
- ・風しんワクチン
- ・水痘(水ぼうそう)ワクチン
- ・おたふくかぜワクチン
- など

【経口生ワクチン】

- ・ロタウイルスワクチン

【不活化ワクチン】

- ・B 型肝炎ワクチン
- ・ヒブワクチン
- ・小児の肺炎球菌ワクチン
- ・4 種混合ワクチン
- ・5 種混合ワクチン
- ・2 種混合ワクチン
- ・日本脳炎ワクチン
- ・ヒトパピローマウイルスワクチン
- ・インフルエンザワクチン
- など

(2) 異なった種類のワクチンを接種する場合の間隔

【注射生ワクチン】

BCG・MR・麻しん・風しん・水痘 など

27 日以上あける

注射生ワクチン

間隔の規定なし

経口生ワクチン

不活化ワクチン

【経口生ワクチン】

ロタ

【不活化ワクチン】

B 型肝炎・ヒブ・小児用肺炎球菌
4 種混合・5 種混合・2 種混合
日本脳炎・ヒトパピローマウイルス
インフルエンザ など

間隔の規定なし

注射生ワクチン

経口生ワクチン

不活化ワクチン

【R7.3 月現在】

◆ 予防接種の対象となる病気とワクチンについて

—ロタウイルス感染症—

(1) 病気の説明

ロタウイルスは、主に5歳未満の乳幼児に多くみられる急性胃腸炎の原因ウイルスです。主な症状は、下痢・嘔吐・発熱などで、ときに脱水・けいれん・肝機能異常・腎不全・急性脳症等を合併することがあります。年齢にかかわらず何度でも感染発病しますが、乳幼児期での初感染が最も重症で、その後感染を繰り返すにつれて軽症化していきます。

(2) ロタウイルスワクチン〔経口生ワクチン〕

ロタウイルスワクチンには2種類（ロタリックス・ロタテック）あり、どちらのワクチンとも、ロタウイルス感染による胃腸炎を約80%予防し、重症ロタウイルス感染症の約95%を予防する効果があります。

ワクチンの1回目接種後1週間以内には、腸重積症^{※3}を発症するリスクが上がります。接種後に、周期的な不機嫌・腹痛・嘔吐・激し泣き・血便のうちのどれか1つでも認められたときは、腸重積症の可能性を考え、速やかに医師の診察を受けるようにしてください。

(3) スケジュール

ワクチン名	ロタリックス(1価)	ロタテック(5価)
接種時期 ^{※1}	出生6週0日から 24週0日後まで	出生6週0日から 32週0日後まで
接種回数	2回接種	3回接種
注意事項	接種後(特に1~2週間)は腸重積症 ^{※2} の症状に注意し、症状がみられた際には、速やかに接種した医療機関に受診してください。	

※1: 1回目接種を出生14週6日後までに接種します。

※2: 腸の一部が他の部分に入り込んでしまう緊急性の高い病気です。ワクチンの接種有無にかかわらず、0歳のお子さんがかかることが多い病気です。

ロタリックス(全2回接種): 1回目[※] → 27日以上 → 2回目

ロタテック(全3回接種): 1回目[※] → 27日以上 → 2回目 → 27日以上 → 3回目

※1回目接種は、生後6週~生後14週6日までに接種すること。

—B型肝炎—

(1) 病気の説明

B型肝炎ウイルスの感染による肝炎の病気です。B型肝炎ウイルスの感染は、一過性の感染で終わる場合と、そのまま感染している状態が続いてしまう場合(この状態をキャリアといいます)があります。キャリアになると慢性肝炎になることがあり、そのうち一部の人では肝硬変や肝がんを発症することがあります。

日本では130~150万人がB型肝炎ウイルスのキャリアだといわれています。感染経路は、大きくわけて2種類あり、キャリアのお母さんから分娩時に赤ちゃんに感染する「母子感染(垂直感染)」とそれ以外の周囲の人との接触で感染する「水平感染」があります。ワクチンを接種することで、体の中にB型肝炎ウイルスへの抵抗力(免疫)ができます。抗体獲得率が高い0歳の時期に接種をして予防することが大切です。

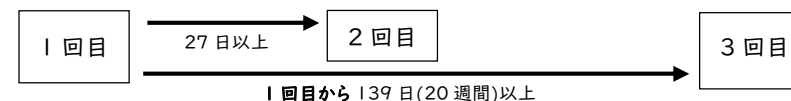
(2) B型肝炎ワクチン〔不活化ワクチン〕

小児の場合は、肝炎の予防というよりウイルスの持続感染を防ぎ、将来発生するかもしれない慢性肝炎・肝硬変・肝がんを防ごうとすることが最大の目的です。

副反応は発熱、発疹、倦怠感および接種部位の疼痛、発赤、腫脹(はれ)などの局所反応が主です。

(3) スケジュール

接種間隔は27日以上の間隔をあけて2回接種し、1回目から139日(20週間)以上の間隔をあけて1回接種するため、全部で3回接種します。



***対象年齢：生後2か月~1歳未満**

—小児の肺炎球菌感染症—

(1) 病気の説明

肺炎球菌は、子どもの感染症で大きな割合を占める細菌のひとつです。この菌は子どもの多くが鼻の奥や気道に保菌していて、保菌しているだけでは問題はありませんが、小さな子どもは肺炎球菌に対する抵抗力を持っていませんので、比較的簡単に肺炎球菌に感染してしまいます。細菌性髄膜炎、菌血症、肺炎、副鼻腔炎、中耳炎といった病気を起こし、それぞれの病気の中で肺炎球菌は高い割合を占めています。

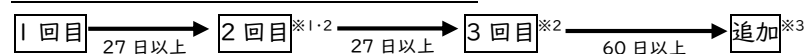
(2) 沈降 15 価肺炎球菌結合型ワクチン〔不活化ワクチン〕

子どもで重い病気を起こしやすい 15 の血清型について、子どもの細菌性髄膜炎などを予防するようにつくられたのが、小児の肺炎球菌ワクチン(13 価肺炎球菌結合型ワクチン)です。

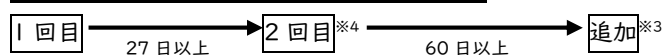
副反応は接種部位の発赤、腫脹(はれ)、全身反応は発熱が約 50%の人にみられます。

(3) スケジュール

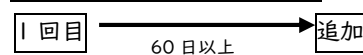
① 1 回目の接種が生後 2～7 か月未満の場合



② 1 回目の接種が生後 7～12 か月未満の場合



③ 1 回目の接種が 1 歳の場合



④ 1 回目の接種が 2～4 歳の場合



- ※1 : 初回 2 回目が生後 12 か月までに終了しない場合、初回 3 回目は接種せず、追加接種を実施。
- ※2 : 初回 2・3 回目が生後 24 か月までに終了しない場合、続きは接種せず、追加接種を実施。
- ※3 : 追加接種は生後 12 か月以降に実施。
- ※4 : 初回 2 回目が生後 24 か月までに終了しない場合、接種を行わず、追加接種を実施。

***対象年齢 : 生後2か月～5歳未満**

—ジフテリア・百日せき・破傷風・ポリオ・ヒブ感染症—

(1) 病気の説明

(ア) ジフテリア

ジフテリア菌の飛沫感染で起こります。現在では国内の患者発生数は年間 0 が続いています。アジヤ地域では時折流行的発生がみられています。感染は主に喉ですが、鼻腔内にも感染します。ジフテリアは感染しても 10%程度の人に症状が出るだけで、残りの人は症状が出ない保菌者となり、その人を通じて感染することもあります。症状は高熱、喉の痛み、犬吠様の咳、嘔吐などで、偽膜と呼ばれる膜が喉にできて窒息死することもあります。発病 2～3 週間後には菌の出す毒素によって心筋障害や神経麻痺を起こすことがあるため注意が必要です。

(イ) 百日せき

百日せき菌の飛沫感染で起こります。ワクチン接種が始まって以来、患者数は減少してきていますが、最近長引くせきの特徴とする学童から思春期、成人の百日せきがみられ、乳幼児への感染源となり、特に新生児・乳児が重症化することがあるので注意が必要です。典型的な百日せきは、普通のかぜのような症状ではじまります。続いてせきがひどくなり、顔を真っ赤にして連続的にせき込むようになります。せきのあと急に息を吸い込むので、笛を吹くような音が出ます。熱は通常出ません。乳幼児はせきで呼吸ができず、くちびるが青くなったり、けいれんが起きたり、突然呼吸が止まってしまうことなどがあります。

—飛沫感染—

ウイルスや細菌が咳やくしゃみ・会話などにより、唾液や気道分泌物のしぶきにつつまれて空気中に飛び出し、約 1m の範囲で人に感染させることです。

(ウ) 破傷風

破傷風菌はヒトからヒトへ感染するのではなく、土の中などにいる菌が、傷口からヒトの体内に入ることによって感染します。菌が体の中で増えると、菌の出す毒素のために、筋肉の強直性けいれんを起こします。最初は口が開かなくなるなどの症状で気付かれ、やがて全身性の強直性けいれんを起こすようになり、治療が遅れると死に至ることもある病気です。

(エ) ポリオ(急性灰白髄炎)

ポリオは「小児まひ」と呼ばれ、日本でも流行を繰り返していた時期もありま



したが、予防接種の効果により国内でポリオウイルスによる麻痺患者の発生はなくなりました。口から入ったポリオウイルスは咽頭や小腸の細胞で増殖します。小腸の細胞ではウイルスは 4～35 日間(平均 7～14 日間)増殖すると言われています。増殖したウイルスは便中に排泄され、再びヒトの口に入り抵抗力(免疫)をもっていないヒトの腸内で増殖し、ヒトからヒトへ感染します。ポリオウイルスに感染しても、ほとんどの場合は症状が出ず、一生抵抗力(終生免疫)が得られます。症状が出る場合、ウイルスの感染が血液を介して脳・脊髄へ広まり、麻痺を起こすことがあります。ポリオウイルスに感染した人の中で、約 1,000～2,000 人に 1 人の割合で手足の麻痺を起こします。一部の人にはその麻痺が永久に残ります。

(オ)ヒブ感染症

インフルエンザ菌、特にb型は、中耳炎、副鼻腔炎、気管支炎などの表在性感染症の他、髄膜炎、敗血症、肺炎などの重篤な全身感染症を起こす、乳幼児にとって問題となる病原細菌です。ヒブによる髄膜炎は 5 歳未満の乳幼児がかかりやすく、特に生後 3 か月から 2 歳になる前はかかりやすいので注意が必要です。日本の年間患者数は少なくとも 400 人と報告されており、約 11%が予後不良と推定されていました。

(2)・百日せきジフテリア破傷風不活化ポリオ 4 種混合ワクチン(DPT-IPV)

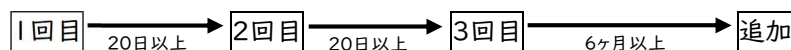
・百日せきジフテリア破傷風不活化ポリオ Hib5 種混合ワクチン(DPT-IPV-Hib)

・ジフテリア破傷風 2 種混合ワクチン(DT)〔不活化ワクチン〕

ワクチンに含まれる病気にかかったことがあるお子さんも4種混合ワクチン・5 種混合ワクチンを使用することができます。重篤な副反応は特に報告されていませんが、機嫌が悪くなったり、腫れが目立つときなどは医師に相談してください。

(3)スケジュール

4 種混合又は 5 種混合第 1 期の初回接種は生後 2 か月以降に行い、その後 20 日以上(標準的には 20～56 日)の間隔をあけて 3 回接種し、初回接種が 3 回終了後、6ヶ月以上(標準的には6ヶ月～1 年半)の間隔をあけて追加接種を 1 回行います。また、第2期として11・12歳時に 2 種混合を 1 回行います。



***対象年齢：第 1 期 生後2か月～7歳6か月未満**

第 2 期 11～13 歳未満

—結 核—

(1) 病気の説明

結核菌の感染で起こります。日本の結核患者はかなり減少しましたが、まだ2万人前後の患者が毎年発生しているため、大人から子どもへ感染することも少なくありません。また、結核に対する抵抗力(免疫)は、お母さんからおなかの中でもらうことができないので、生まれたばかりの赤ちゃんもかかる心配があります。

(2) BCG ワクチン〔生ワクチン〕

BCGは牛型結核菌を弱毒化してつくったワクチンです。BCGの接種方法は、日本では管針法(スタンプ方式で上腕の2カ所に押しつける)で接種します。

接種後10日頃に接種局所に赤いポツポツができ、一部に小さい膿ができることがあります。この反応は、接種後4週間頃に最も強くなりますが、その後はかさぶたができて接種後3ヶ月までには治り、小さな傷跡が残るだけになります。

副反応としては、接種をした側の脇の下のリンパ節がまれに腫れることがあります。通常、そのまま様子を見てかまいませんが、ときにただれたり、大きく腫れたり、まれに化膿して自然に破れて膿が出る場合があります。

(3) スケジュール

生後1歳(標準的には生後5か月～8か月)になるまでに1回接種します。

***対象年齢：1歳未満**

—麻しん・風しん—

(1) 病気の説明

(ア) 麻しん

麻しんウイルスの空気感染によって起こる病気です。感染力が強く、予防接種を受けないと多くの人がかかる病気です。発熱、せき、鼻汁、めやに、発疹を主症状とします。

最初3～4日間は 38℃前後の発熱で、一時治まりかけたかと思うと、また 39～40℃の高熱と発疹が出てきます。高熱は3～4日で解熱し、次第に発疹も消失します。しばらくは色素沈着が残ります。

主な合併症としては、気管支炎、肺炎、中耳炎、脳炎があります。患者 100 人中、中耳炎は約7～9人、肺炎は約1～6人に合併します。脳炎は、約 1,000 人に1～2人の割合で発生がみられます。

また、亜急性硬化性全脳炎 (SSPE) という慢性に経過する脳炎は、はしか患者の約 10 万例に1～2例発生します。また、医療が発達した先進国であっても、麻しんにかかった人の約 1,000 人に1人の割合で死亡するとても重症の病気です。我が国でも平成 12 年前後の流行では年間 20～30 人が死亡しました。

—空気感染—

ウイルスや細菌が空気中に飛び出し、広い空間で人に感染させることです。麻しん(はしか)、水痘(水ぼうそう)、結核等が空気感染します。

(イ) 風しん

風しんウイルスの飛沫感染によって起こる病気です。潜伏期間は2～3週間です。軽いかぜ症状で始まり、発疹、発熱、後頸部リンパ節腫脹などが主症状です。そのほか眼球結膜の充血もみられます。発疹も発熱も約 3 日間で治りますので、「三日ばしか」とも呼ばれることがあります。合併症として、関節痛、血小板減少性紫斑病、脳炎等が報告されています。

感染症発生動向調査によれば、平成 30 年から令和元年の風しんの流行(累計 5,247 人)で、血小板減少性紫斑病が 21 人、脳炎が 2 人報告されました。また、大人になってからかかると重症になることがあります。

妊婦が妊娠 20 週頃までに風しんウイルスに感染すると、先天性風しん症候群と呼ばれる先天性の心臓病、白内障、聴力障害、発育発達遅延などの障害を持った児が生まれる可能性が非常に高くなります。風しんワクチンを受けていない方は、妊娠前に予防接種を受けておくことが大切です。

(2) 麻しん風しん混合(MR)ワクチン〔生ワクチン〕

麻しんウイルス、風しんウイルスを弱毒化して作ったワクチンです。1回の接種で95%以上の子どもは免疫を得ることができますが、付き損ねた場合の用心と、年数がたつて免疫が下がってくることを防ぐ目的で、2回目の接種(第2期)が行われるようになりました。麻しんまたは風しんにかかったことがある方も、MR ワクチンを接種することができます。

病気の治療や予防などのためガンマグロブリン製剤の注射を受けたことがある方は接種時期を主治医と相談してください。

副反応としては、アナフィラキシー、血小板減少性紫斑病、脳炎、けいれんなどがあります。麻しんにかかると症状は重く、後遺症を残したり死亡することもあります。風しんにかかった妊婦からは心臓の異常、白内障、網膜症、聴力障害、知能障害などがある先天性風しん症候群という先天的な障害をもつ児が生まれることがあります。

(3) スケジュール

第1期として1歳で1回接種し、第2期として小学校就学前の1年間に1回接種します。

***対象年齢：第1期 1～2歳の前日まで**

第2期 5歳以上7歳未満の小学校就学前1年間(年長児)

－水痘－

(1) 病気の説明

水痘は、水痘・帯状疱疹ウイルスが原因の感染症です。ほとんどの人が幼児期から学童期にかけてかかりますが、1歳以下の乳児にもかかる場合があります。水痘や帯状疱疹の人に接触してから約2週間の潜伏期の後、発熱とともに、おなかや背中に赤い虫さされのような発疹ができ、その先端に水をもつようになります。発疹は4～5日間増え続け、身体・顔・頭皮・口の中にまで広がっていきます。発疹は2～3日間で乾燥し、かさぶたとなります。かさぶたは2週間前後でとれ、少し痕が残りますが、ほとんどが半年ほどで消えていきます。

また、水痘・帯状疱疹ウイルスは再活性化をする場合があります、免疫機能が衰えた時に帯状疱疹を発症することがあります。

健康な子供にとって水痘は比較的軽い病気ですが、免疫不全状態の患者さんではまれに脳炎・髄膜炎を伴って重症化することがあります。また、アトピー体質の子は皮膚が弱いため、発疹が強くてることがあります。

(2) 水痘(水ぼうそう)ワクチン〔生ワクチン〕

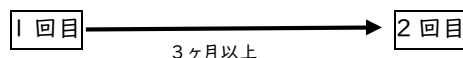
水痘・帯状疱疹ウイルスを弱毒化して作った生ワクチンです。同じ生ワクチンの麻疹、風しんなどのワクチンと比べ、その効果は少し劣ります。予防接種を受けた人のうち、約20%はのちに水痘にかかることがありますが、もしかかっても軽くすむとされています。

水痘患者に接触した場合、3日以内にワクチンを接種すれば発症を予防できるとされ、院内感染の防止にも使用されています。

健康小児、成人では副作用はほとんど認められませんが、時に発熱、発疹がみられ、まれに局所の発赤、腫脹(はれ)、硬結(しこり)がみられます。

(3) スケジュール

1歳～1歳3か月になるまでの期間を標準的な接種期間として1回目の注射を行います。そこから3ヶ月以上(標準的には6ヶ月～12ヶ月)の間隔をあけて2回目の接種を1回行います。



***対象年齢：1歳～3歳の前日まで**

－日本脳炎－

(1) 病気の説明

日本脳炎ウイルスの感染で起こります。ヒトから直接ではなくブタなどの体内で増えたウイルスが蚊によって媒介され感染します。7～10日の潜伏期間の後、高熱、頭痛、嘔吐、意識障害、けいれんなどの症状を示す急性脳炎になることがあります。ヒトからヒトへの感染はありません。

日本脳炎ウイルスに感染した人のうち100～1,000人に1人が脳炎等を発症します。脳炎のほか髄膜炎や夏かぜ様の症状で終わる人もいます。脳炎にかかった時の致死率は約20～40%ですが、治った後に神経の後遺症を残す人が多くいます。

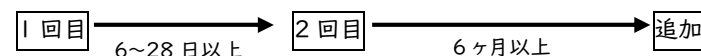
国内での患者発生は西日本地域が中心ですが、日本脳炎ウイルスは西日本を中心として日本全体に分布していきます。飼育されているブタにおける日本脳炎の流行は毎年6～10月頃まで続きますが、地域によっては約80%以上のブタが感染しています。

(2) 乾燥細胞培養日本脳炎ワクチン〔不活化ワクチン〕

乾燥細胞培養日本脳炎ワクチンは、ベロ細胞という細胞でウイルスを増殖させ、ホルマリンなどでウイルスを殺し(不活化)、精製したものです。副反応は特に重篤なものは報告されていません。

(3) スケジュール

日本脳炎第1期初回接種は生後6か月(標準的には3～4歳)以降に6～28日の間隔をあけて2回接種し、追加接種は初回接種終了後6ヶ月(標準的にはおおむね1年)以上間隔をあけて1回接種します。また、第2期は9～13歳未満(標準的には9～10歳)に1回接種します。



***対象年齢：第1期 生後6か月～7歳6か月未満**
第2期 9～13歳未満

ーヒトパピローマウイルス感染症ー

(1) 病気の説明

ヒトパピローマウイルス(HPV)は、ヒトにとって特殊なウイルスではなく、多くのヒトが感染し、そしてその一部が子宮頸がん等を発症します。100 種類以上の遺伝子型がある HPV の中で、子宮頸がんの約 50~70%は、HPV16・18 型感染が原因とされています。HPV に感染しても、多くの場合ウイルスは自然に検出されなくなりますが、一部が数年~十数年かけて前がん病変の状態を経て子宮頸がんを発症します。子宮頸がんは国内では年間約 11,000 人が発症し、年間約 2,900 人が死亡すると推定されています。

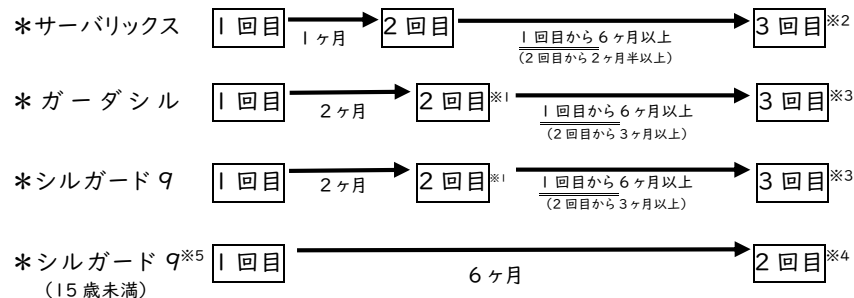
(2) 2 価ヒトパピローマウイルスワクチン(サーバリックス)

4 価ヒトパピローマウイルスワクチン(ガーダシル)

9 価ヒトパピローマウイルスワクチン(シルガード9) [不活化ワクチン]

現在国内で接種できる HPV ワクチンは 3 種類あり、子宮頸がん患者から最も多く検出される HPV16・18 型に対する抗原を含んでいる 2 価ワクチンと尖圭コンジローマや再発性呼吸器乳頭腫の原因ともなる 6・11 型も加えられた 4 価ワクチンがあります。また、さらに 31・33・45・52・58 型が加えられた 9 価ワクチンは膣上皮内腫瘍などの原因にも効果があります。HPV 未感染者を対象とした海外の報告では、感染及び前がん病変の予防効果に関して、各ワクチンとも高い有効性が示されており、初回性交渉前の年齢層に接種することが各国において推奨されています。

(3) スケジュール



※1:1 ヶ月以上の間隔をあけて 2 回接種を実施。

※2:1 回目から 5 ヶ月以上の間隔をあけ、かつ、2 回目から 2 ヶ月半以上の間隔をあけて 1 回実施。

※3:2 回目から 3 ヶ月以上の間隔をあけて 1 回実施。

※4:5 ヶ月以上の間隔をあけて 2 回接種を実施。

※5:15 歳になるまでに 1 回目接種を実施すれば、2 回で終了可能。5 ヶ月未満で 2 回目を接種した場合は、3 回目を実施。

*対象年齢：小学 6 年生~高校 1 年生相当(16 歳の 3 月 31 日まで)

◆副反応が起こった場合の対応

(1) 通常みられる反応

ワクチンの種類によっても異なりますが、発熱、接種局所の発赤・腫脹(はれ)、硬結(しこり)、発疹などが比較的高い頻度(数%から数十%)で認められます。通常、数日以内に自然に治るので心配の必要はありません。

(2) 重い副反応

予防接種を受けた後、接種局所のひどい腫れ、高熱、ひきつけなどの症状があったら、医師の診察を受けてください。お子さまの症状が予防接種後副反応疑い報告基準に該当する場合は、医師から独立行政法人医薬品医療機器総合機構へ報告が行われます。

ワクチンの接種によっては、極めてまれ(百万から数百万人に1人程度)に脳炎や神経障害などの重い副反応が生じることもあります。このような場合に救済の審査を実施し、厚生労働大臣が認定したときは、予防接種法に基づく健康被害救済の給付の対象となります。

(3) 紛れ込み反応

予防接種を受けたしばらく後に、何らかの症状が出現すれば、予防接種が原因ではないかと疑われることがあります。しかし、たまたま同じ時期に発症した他の感染症などが原因であることが明らかになることもあります。これを「紛れ込み反応」と言います。

(4) 予防接種による健康被害救済制度

- ① 定期接種によって引き起こされた副反応により、生活に支障が出るような障害を残すなどの健康被害が生じた場合には、予防接種法に基づく給付を受けることができます。
- ② 健康被害の程度等に応じて、医療費、医療手当、障害児養育年金、障害年金、死亡一時金、葬祭料の区分があり、法律で定められた金額が支給されます。死亡一時金、葬祭料以外については、治療が終了する又は障害が治癒する期間まで支給されます。
- ③ ただし、その健康被害が予防接種によって引き起こされたものか、別の要因(予防接種をする前あるいは後に紛れ込んだ感染症あるいは別の原因等)によるものなのかの因果関係を、予防接種・感染症医療・法律等、各分

野の専門家からなる国の審査会に審議し、予防接種によるものと認定された場合に給付を受けることができます。

- ④ 予防接種法に基づく定期接種として定められた期間を外れて接種を希望する場合、予防接種法に基づかない接種(任意接種)として取り扱われます。その接種で健康被害を受けた場合は、独立行政法人医薬品医療機器総合機構法に基づく救済を受けることになりますが、予防接種法を比べて救済の対象、給付額等が異なります。